



戦争なんか **大**キライ

学校にみる滋賀県民の戦争体験

もくじ

はじめに

戦争のあいだ、学校ではいろんなできごとがありました。学校の運動場にイモ畑ができたり、講堂にたくさんの兵隊さんが泊まっていたり。音楽の時間は‘ラ’の音の勉強。‘ラ’の音は戦争の音だったのです。学校に爆弾がおちてきたこともありました。遠い南の島や海などの戦争でお父さんが亡くなった子どもたちもたくさんいました。

そのとき子どもだった人たちは、二度とこんな戦争はごめんだ、もう戦争なんかしたくないと思いました。

だから二度と戦争が起らないように、60年ほど前の戦争のことを記録して、みんながそれをちゃんとおぼえておき、平和のためのいろいろな取り組みをしていかなければならないと考えました。そのために、いま戦争に関するいろいろな資料をあつめたり、戦争体験のある人たちのお話を記録したりしています。そしてそれをもとに平和祈念館という施設をつくることにしています。

この本は、戦争中に滋賀県で起きたいろいろなできごとのうち、おもに小学校で起きたことをまとめたものです。またこの本をつくるために、総合的な学習の時間などに、地域の戦争のことをいろいろ調べている小学校のみんなにも協力してもらいました。みなさんほんとうにありがとうございました。

もしみなさんの学校でも、滋賀県と戦争について調べてみたいと思ったら、ぜひ取り組んでください。その記録は、平和祈念館にきっと役立つと思います。

この本を読んでみて感じたことや、わからないことがあったら、お手紙やEメールをくださいね。

※平和祈念館はまだ仮の名前です。

ロダン像のへこみ —爆撃された小学校—	P2. 3	寒い、しんどい、 おなかへった —戦争のころの小学校—
P4. 5	“ラ”の音が空襲警報の サイレンの音よ —小学校で教わったこと—	P6. 7
P8. 9	運動場のイモ畑 —戦争と食べもの—	疎開のお友だち —滋賀県にやってきた大阪の子どもたち—
P10. 11	P12. 13	植木ばちが 兵器にかわる！ —焼きものの地雷と手榴弾—
アメリカから おひなまつりを見にやってきた —青い目の人形の物語—	P14. 15	
P16. 17	ねらわれた学校 —飛行場に近い小学校—	兵隊さんのお見送り —戦争に行った人びと—
P18. 19	P20. 21	消された教科書 —終戦とその後のこと—
滋賀県と戦争	P22. 23	
P24. 25	しらべてみよう、滋賀県の戦争のこと しらべてみよう！キミたちの学校と戦争のことを	

城南小学校のロダン像 ▶
彦根市の城南小学校の校門のわきにはロダン像があります。みんなが毎日見ているロダン像です。ロダン像の敷石の裏がわを見るとへこんだようなあとがあります。56年前からずっとある“へこみ”です。



敷石のへこみ ▶



へこみ

ロダン像の

爆撃された小学校



城南小学校にはいまでも爆弾のはへんがのこっている

田んぼのあな

昭和20年、城南小学校は福満国民学校という名前でした。6月26日火曜日、その日の朝はくもり空でした。空襲を知らせるサイレンがなりひびいたので、先生は麦かりの手伝いをするために登校してきたばかりの子どもたちをすぐに家に帰しました。やがて彦根の上空にB29爆撃機が何機かそろってやってきました。いつもは通っていただけでしたが、その日はそのうちの1機がやってきて爆弾をおとしました。いくつかの爆弾は福満国民学校の近くの田んぼにおち、そこには大きなあながあきました。

空襲のお話

飛行機から爆弾をおとしたり、機関銃で攻撃したりすることを「空襲」っていうんだ。空からだ地上のことがよく見えるからね。東京や名古屋、大阪で大きな空襲があったことや広島・長崎へ原爆がおとされたこと、みんな知っているかな。軍の施設や武器なんかをつくる工場もねらわれたけど、戦争が終わる1年くらい前からは、おおぜい人がくらしている場所にたくさん爆弾がおとされて、一度に何千人何万人もの人たちが亡くなったりケガをしたりした。家がなくなってしまった人もいっぱいいた。

滋賀県でもいくつかの工場やまちに爆弾がおとされたんだ。それから、琵琶湖が大阪や名古屋を空襲する目印になって、滋賀県の上空を爆弾をつんだアメリカの飛行機が通るから、そのたびに空襲を知らせるサイレンがなった。

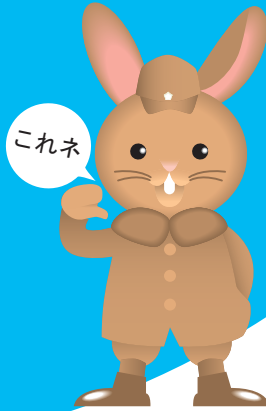
空襲は日本だけにあったことじゃなくて、中国では重慶というまちが日本軍に何度も空襲されたし、ヨーロッパではイギリスやドイツのまちが空襲されて、まちがこわれちゃった。

いまだって空襲はあるんだ。「空爆」って聞いたことがあるだろう。アメリカ軍のアフガニスタンへの空爆はテレビで見たことがあると思うし、「ユーゴ空爆」のときには、もとJリーガー・ストイコヴィッチ選手が試合中に、空爆反対のアピールをしたことを知っている人もいると思う。

空襲があるところでは、みんな「こわい」って思いながら、ふだんすごしている場所から逃げなきゃならないってこと、そして爆弾にあつたら死ぬかもしれないってことおぼえてほしい。



城南小の日記には、爆撃があったことと子どもたちがぶじだったことが書かれている。



これネ

軍用ってなに？

先生、生きててよかった！



4月に先生になったばかりの水野道子さんは、子どもたちが家に帰ってしばらくして、空襲にあったんだ。近所の人たちは、先生はみんな死んだと思って見にきてくれた。防空壕に入っていた水野先生たちは無事だったけど、爆風で校舎の窓ガラスはほとんどわれて、屋根もふき飛んでしまった。それから子どもたちはびくびくしてブーンとサイレンがなるだけでも頭をかくすようになったんだ。

戦争が終わってまもないころの学校のようす。窓ガラスはまだこわれたまま。窓にぶら下がっているのはイモづる。みんなで食べていた。



城南小の6年生が思ったこと

平成9年、6年1組のみんなが戦争について調べたときのこと。地域の人たちに「城南小への爆撃」の話も聞いたんだ。

『ばくだんのはへんを持ってきて、小さいのにけっこう重いんだなあと思った。』『私の家の近くにばくだんがおちたことに、とてもびっくりしました。』『どうして工場でもないのに、城南の近くにばくだんをおとしたのかなあと思いました。』『永井さんはお父さんをなくしても、戦争中だったから泣いていられなかったとおっしゃっていましたが私は戦争中だったとしても泣いていたと思います。』

ケガをした高居くん

あさひのりこくみんがっこう 旭森国民学校（いまの旭森小学校）の6年生の高居豊三さん。5月14日の朝、いつものように登校するとすぐに空襲を知らせるサイレンがなり、家に帰るとちゅうのできごとだった。日本の飛行機が北の方に飛んでいった瞬間、高居君は目の前の道路でまっ赤な火の玉が2コはじけるのを見た。すごい音がし、両足が「あつい」と感じた。気がつくと足に機関銃弾のはへんがささっていた。こわい体験をした高居くん。ケガはなおっても、福満国民学校への爆撃のときには、「ズシーン」という音におどろいて、近くのせり川に飛びこんだらいだ。



城南小でかっているウサギ。戦争中は軍隊のためにかっていた。

目玉が爆風でとばないように、鼓膜がやぶれないようにするくんれん



5年生の杉本功仁子さん。学校の体育の時間は、できるだけ小さくなってふせるくんれんばかり。功仁子さんは、いまのサンパレスの前の大きな道で手当てを受けている人を目撃した。その人は小泉町の消防団員の人で亡くなったんだ。

寒い、しんどい、おなかがへった

—戦争のころの小学校—

運動場の日当たりのいいところは、ぜんぶ畑やった

昭和19年、20年ぐらいになると、もう遊び場もないくらい畑ばかりやった。サツマイモとかジャガイモとか、すぐできて、はらがふくれるものばかりうえるようになった。一番イモがとれるとむしてアルミの皿に入れてもろて食べた思い出があるなあ。

▼ 運動会のような



子どもたちのおゆうぎを見る兵隊さんたち

昭和16年4月、^{かたこく}堅田国民学校という名前になった。



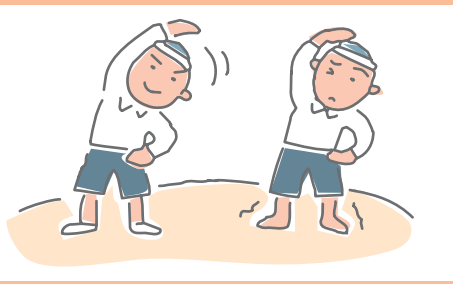
^{おおつ}大津市^{かた}堅田のおじいちゃんたちが戦争のころの話をしてくれました。おじいちゃんたちは、いまの堅田小学校に通ってました。

^{ぼうくうずきん}防空頭巾という空襲から頭を守るためのぼうしをかぶり、^{むね}胸には血液型をかいた名ふだをつけて毎日学校へ行きました。授業中、^{じゆぎょう}稲かりや^{いね}麦かりの手伝いにも行きました。放課後、^{こうしゃ}校舎の横に^{くうしゅう}空襲のときにかくれるための^{ぼうくうごう}防空壕をつくりました。近所の人が戦争に行くときには、見送りにも行きました。

これは堅田小だけではなくて、戦争のころの多くの小学生が体験したことです。

クジビキであたるくつ

3カ月に1ぺんぐらい学校にくつの^{はいきゆう}配給があった。そやけど、50人いても10人ほどしかあたらへんから、クジや。くついうたかてひどいもんやった。古タイヤとかやった。あたらへんもんはわらゾウリやゲタをはいてた。ぼくがいちばんつらかったんは、冬の寒いときにはだして体育をやったことや。



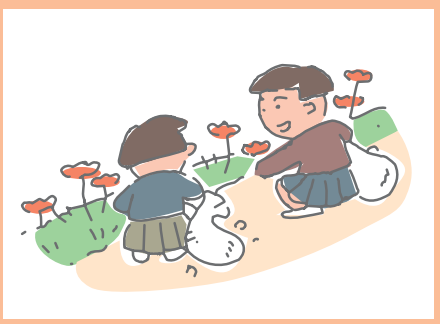
戦争の話を聞く

堅田小学校の6年生は、戦争のことを調べたり、^{ちいき}地域のおじいちゃん、おばあちゃんから戦争のころの話を聞いたりした。



彼岸花の根っこほり イナゴとり

^{ひがなばな}彼岸花の根をとりに、学校から行かされたなあ。^{ふうせんぼくだん}風船爆弾にはるのりに使うためやというのが後になってわかった。イナゴとりもあったなあ。とったイナゴは学校で熱湯につけて、それをほしてね。そやけど、何につこたんやろ。薬かなあ。ぼくらが食べたおぼえはない。



▲ 堅田小6年生のゆめちゃんがかいたイナゴとり。ゆめちゃんは、歯のあいだにはさまって食べにくそうだけどカルシウムたっぷりだから一度食べてみたいって思っている。

^{ふうせんぼくだん}風船爆弾は、爆弾をつんだ大きな風船をアメリカ大陸まで飛ばしてアメリカを攻撃しようとしたもの。ほんとうにアメリカまでとどいた風船爆弾もあって、ぎせいになった人もいた。

馬のフン

夏休みはなあ。馬にくわす草かりやらしよったなあ。堅田小学校は、軍隊が^{あいはの えんしゅう}饗庭野へ演習に行くとき、その休憩所になってたんや。そのときに馬にくわす草用意しとくんや。馬は運動場にくいを打ってつながれてた。馬が100も200もおったやろなあ。運動場がフンだらけになった。それをそうじするの**ぼくら**。フンは高学年が集めてかわかして、たいひにして、学校の農園のこやしになった。



▲ 堅田は農家の多い地域だったので、学校の農場でクワやスコップの使い方を習ったり、田うえなどをする農業の授業があった。

60年前の小学生

いまから60年くらい前の小学生は、どんなことしていたか想像できるかな。ちょうどみんなのおじいちゃんやおばあちゃんが小学生だったころのこと。そのころは、いまとはちがって、6年生の上^{こうとうか}に高等科が2年生まであったから、みんなより少しお兄さん、お姉さんの小学生もいたんだ。昔はテレビもゲーム機もなかったし、いまよりも家のお手伝いをたくさんしなくちゃいけなかったけど、朝おきて学校に行って、勉強の時間がいやだなあって思ったり、友だちと遊んだり、けんかしたり、みんなと同じような毎日をすごしていたと思うよ。でも、運動場が畑になったり、^{じゆぎょう}授業中に麦や^{いね}稲をかる手伝いに行ったり、夏休みに兵器の材料を集めるようになった。それから、お父さんが戦争に行ったり、お兄さんが兵隊さんの学校に行った子どもたちもいた。それは、昔の話だからじゃない。戦争があったからなんだ。

もくじへ
“ラ”



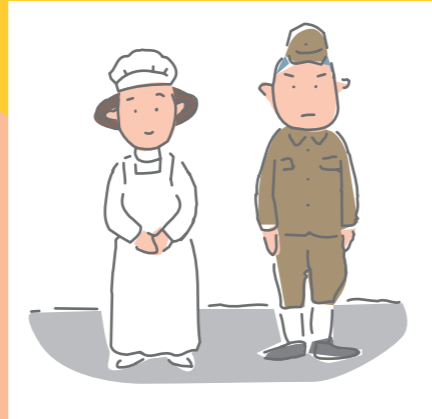
くうしゅうけいほう
の音が空襲警報のサイレンの音よ

—小学校で教わったこと—

小林幸子さんは、昭和18年4月、野洲町の篠原国民学校（いまの篠原小学校）の先生になりました。まだ子どもたちは、空襲のこわさを知らないころでした。小林さんは、オルガンで“ラ”の音を続けてならしました。それが空襲警報という空襲を知らせるサイレンの音だと子どもたちに教えたのです。

みんな大きくなったら…

小林さんが先生になったころは、国語や算数なんかには、戦争のことや兵隊さんのことが書かれていた。戦争が始まるまでは、お花の絵とかをかいていた子どもたちも、兵隊さんや軍艦、飛行機の絵をかいたら二重マルがもらえるようになった。音楽の時間には、「軍歌」という戦争の歌をならったんだ。「鉄砲をついだ兵隊さん」「日本海海戦」とか。みんなのおじいちゃんやおばあちゃんは知っているかな？
小林さんが子どもたちに「大きくなったら、なにになるの」って聞くと、男の子は「兵隊さん」、女の子は「看護婦さん」ってみんな答えたんだ。



兵隊さんになれない女の子は、戦場でケガをした兵隊さんを看病する看護婦さんにあこがれた。

オルガンの音 ほんものの音

日本を空襲するアメリカの飛行機「B29」の音もオルガンで教えました。やがて、子どもたちは毎日のように、空襲警報のサイレンの音とB29の飛んでくる音を聞く日がやってきました。



◀ いまの篠原小学校



これがB29の音です。この音を聞いたらすぐに安全なところに逃げましょう



八日市市の八日市国民学校の3年生だった中島伸勇さん。音楽の時間、先生がピアノのけんばんの上で5本の指をふるわせながらB29の音をひいてくれたんだ。とてもぶきみな音で中島くんはすごく不安な気持ちになった。やがて、ほんとうにB29が飛んでくるようになった。先生のピアノの音と同じかどうかわからないけど、B29はどうだろうと飛んでいった。

「国民学校」という小学校
「少国民」という小学生

みんな大きくなったらなにになる？きっといろんな夢があるよね。でも、戦争のときは、どうして兵隊さん、看護婦さんになりたいと思っていたんだろう。
日本がアメリカと戦争をはじめたのは昭和16年12月。同じ年の4月にそれまでの尋常小学校は国民学校という名前にかわった。そして、子どもたちは少国民とよばれるようになった。小さくてもりっぱな国民で、戦争に協力しなければならないという意味があった。
少国民といわれる子どもたちは、アメリカの兵隊さんは人間じゃないと教えられたり、日本は神国だから神風がふいていつか勝つんだというふうに教えられていて、みんなもそう信じていた。山の中を走りまわって戦争ごっこみたいなことをする授業があったり、運動会では、紙にかいたアメリカやイギリスの旗をふみながら、アメリカをやっつけるんだ、イギリスをやっつけるんだといって行進したりした。だから、男の子はみんなおとなになったら兵隊さんになると思っていた。りっぱな兵隊さんになることが望まれていたんだ。そして、戦争のころはそれがあたりまえのことだった。



八日市市の御園尋常小学校の奉安殿
御真影とよばれる天皇・皇后の写真などが入れられていた。空襲のときなど、先生はまずこの写真を守らなければならなかった。

そのころの小学校は、若い男の先生は戦争に行ってしまうと、校長先生や教頭先生のほかは、ほとんど女の先生だった。学校には奉安殿というのがあって、その中には御真影という写真が入っていて、空襲警報があるとそれをもって防空壕の中に入らなければならなかった。だから、小林さんは、夜、学校にとまって番をする宿直のときには、空襲警報がないようにといのつたんだ。

どうか今夜は空襲警報がありませんように

←もくじへ

困った雪、 楽しい雪

かいづ 海津村（今のマキノ町）にとう着したのは、かんなんこくみんがっこう おおさ菅南国民学校（大阪市北区）の子どもたち。琵琶湖で顔をあらい、お米もあらっていた。もちろん魚つりもした。

昭和19年の冬、いまのマキノ東小学校の運動場には170センチの雪が積もり、雪かきに苦労したけど、子どもたちは大好きな雪。みんなでスキーを楽しむことができた。



海津国民学校（いまのマキノ東小学校）での受け入れ式

▲畑をたがやす

▲昭和19年の冬は大雪だった

男の子たちは魚つり

夏の終わりのできごと

ながはま 長浜市の長浜国民学校（いまの長浜小学校）1年生の武田倫江さんの作文です。

昭和19年8月31日から9月2日にかけて、おおさか大阪市内から1万1千人の小学生が滋賀県にとう着しました。

3年生から6年生の子どもたちが、家族とわかれて、滋賀県内のいろいろなところで、友だちや先生たちとくらししました。そして地元の小学校に通いました。みんなの小学校にも来ていたかもしれせん。



▲倫江さんが書いた大阪の女の子たちのファッション。とてもおしゃれだけどゲタをはいている。

いまの長浜小学校。ここに金剛国民学校（大阪市中心区）の子どもたちが来た。



疎開のお友だち

滋賀県にやってきた大阪の子どもたち

「大阪のあじ」がしたドーナツ

子どもたちがいちばんうれしかったことは、お母さんやお父さんと会える面会の日。いろいろ食べ物をもってきてくれるから、面会のあとは食べすぎておなかをこわす子もいた。
西甲良村（いまの甲良町）に来た小学4年生の坂本正邦さんの絵日記。

『今日は、うれしい、面会日。朝からのしみにまててみた。三時間目の体操がすんで、部屋へかえってくると、もうおいでになってみた。四時間目がすんで、食事をたべ、（いらっしやいませ）のあいさつをして、ごらく會をした。大阪から、はるばる、ぼくらにおかしをもつてこられた。どうなつを、もらいました。大阪のあじがしました。それから、さつまいもをいただきました。そのばん、おなががいっぱいでした。』



学童疎開のお話

東京、名古屋、大阪などは都会だから、はげしい空襲があるかもしれない。そこで子どもたちは、空襲の少ない地方に学校などでまとまっていどうすることになったんだ。それを学童疎開っていうけど、国が決めたことだからことわることはできなかった。

だけど、疎開の生活に必要な費用を用意できなかったり、からだが弱くて疎開に行けない子どもたちもいた。

学童疎開は、日本だけじゃなくてイギリスやドイツでもあったんだよ。イギリスの学童疎開は日本よりも早くて、第二次世界大戦が始まったころに開始された。

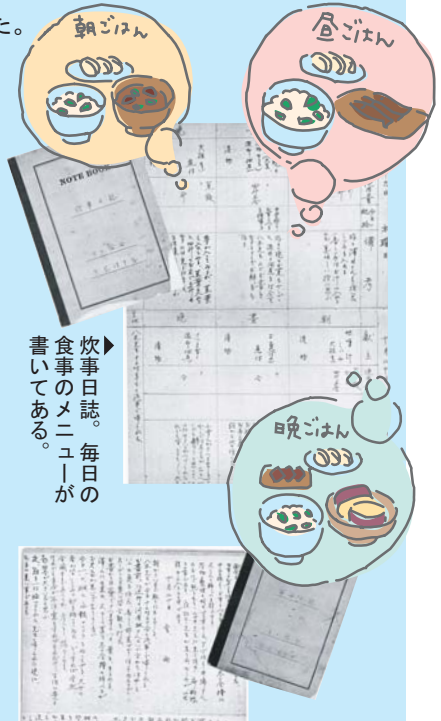
滋賀県には大阪からたくさん子どもたちがやってきた。みんなと同じくらいもう少し小さい子どもたちだった。お寺などで生活していたんだ。最初は友だちといっしょで楽しいと思ったけど、お父さんやお母さんとはなれてくらすのってさびしいよね。それに、戦争中だから食べるものが少なくなって、いつもおなかをすかせていたんだ。畑でつくったサツマイモや野菜が貴重なおかずで、木の実なんかがおやつだった。

戦争が終わって子どもたちがようやく帰れたのは10月。子どもたちを待っていたのは、空襲で焼けてしまった大阪のまちだった。

今津町には堀川国民学校（大阪市北区）の子どもたちが来た。子どもたちの世話をした吉岡佳予さんは、『炊事日誌』と『寮母日誌』に生活のようすをくわしく書いている。

お米など食べものが少なくなってきて、菜っぱをまぜたごはんが多くなり、おかずが小魚だったらすごいごちそうだった。小さなおイモをにたものでも子どもたちは大喜びするようになった。

菜っぱ入りのごはん、みそ汁、つけもの



炊事日誌。毎日の食事のメニューが書いてある。

▲寮母日誌。イナゴとりにてかけたことや冬の食料にするために、サツマイモのつるや葉をほしたことが書かれている。いちばんたいへんだったのはシラミ退治のようだ。

運動場のイモ畑

戦争と食べもの



この校舎は戦前にできた建物。そのころは木の校舎が多かったから、コンクリートでできた校舎はめずらしかった。



昭和18年3月の卒業写真



おおつ かみたなかみ
大津市の上田上小学校の運動場です。戦争中、運動場のほとんどはイモ畑になってしまって、子どもたちは道で遊んだりしていました。みんなで作ったおイモは、焼いたり、「イモずるめ」にして食べました。「イモずるめ」というのは、おイモをふかしてほしたほぞんができる食べものです。それはいまでもお店で売っています。



上田上小学校の運動場

虫取りの授業



昭和17年の4月から上田上小学校の先生になった芥川美栄子さん。芥川さんは、子どもたちをつれて草つきに行ったり、イナゴとりに行ったりした。イネの葉のうらにつく虫をとるのも勉強。「虫取り」の授業があったんだ。

いなごとり

いなごは学校に集め、一括して調理し。味つけはしょうゆ、おいしかた。食べると足がいたいで、よく取るようにした。



高月町東物部のおじいちゃん、おばあちゃんがいなごのとり方を教えてくれた。

上田上小学校には、昔の「校中日誌」が残されていて、毎日の学校でのできごとが書いてある。



校中日誌

昭和20年3月4日の校中日誌には、「増産現役軍隊午後四時半本校着 講堂及貴賓室、応接室、裁縫室使用」と書かれている。

上田上は田んぼの多い地域だったので、60人ほどの兵隊さんがジャガイモをつくりにやってきた。兵隊さんは小学校の講堂などにとまって、ジャガイモうえにでかけた。上田上が終わると次は田上にうつっていくという、滋賀県内を移動しながらジャガイモをうえる、兵隊さんのグループだった。



ジャガイモをつくりにきた兵隊さん

防空壕の上には乗ってはいけません



B29が上空を飛んでくるとみんなが防空壕をつくり、避難訓練が行われるようになった。校中日誌には、防空壕の上で遊んではいけないとか、中に入ってはいけないというようなことが書かれている。きっと子どもたちはできあがった防空壕にワクワクしたんだろうね。

食べもののこと

上田上もそうだけど、滋賀県はおいしいお米がたくさんとれるところだよ。だから、戦争が始まるとたくさんお米をつくるようにと国から言われたんだ。そして、とれたお米は決まった量をおさめなければならなかった。それを「米の供出」という。

だから、お米をたくさんつくっていても、家で食べるお米はかぎられていたから、ごはんは麦やイモ、大根なんかをまぜて量をふやして食べていたんだ。戦争が長びくと、お米だけじゃなくて麦や豆や野菜なんかもだんだん少なくなってきた。

戦争になると、どうして食べものが不足するのかわかるかな。いままで働いていた男の人たちがほとんど戦争に行ってしまったからだ。戦争に行ったお父さんのかわりに、お母さんやおじいちゃん、おばあちゃんが田畑の仕事をした。もちろん、子どもたちも手伝ったけど、昔は、機械が少なくてほとんどが手仕事だったから、たくさん量の作物をつくるのがむずかしかったんだ。とれた作物は、戦争をする兵隊さんにたくさん上げたから、少ない量をみんなで分けなければならなかった。

お店に行っても買えるものがほとんどなくなった。「配給」といって、お米もうどんもパンも、それから調味料のミソやしょう油も、決められたものを決められた量しか買えなくなったんだ。量もだんだんへってきて、お魚やお肉なんかはたまにしか手に入らなかった。さとうもないから、あまいおかしもなくて、おやつをさがしに子どもたちは山や野原に出かけていった。食べものがないくらはは、戦争が終わってもしばらく続いたんだ。

鉄のように かたくなる土

戦争が続くと、鉄などの金ぞくが不足したから、焼きものを兵器の材料にすることを考えました。焼きものはね土できていますが、ものすごい高温（1300度くらい）で焼くとかたくなって、石でたたくと金ぞくに近い音がします。太平洋戦争が始まってしばらくすると、信楽の焼きもの工場では、地雷や手榴弾の材料をつくるようになりました。



▲小学校の焼きもの資料室

▼いまの信楽小学校



みんな
で地雷
づくり

地雷や手榴弾の材料をつくる人が足りなくなって、信楽の国民学校の子どもたちは、ときどき焼きもの工場へ行かなければならなくなった。



信楽は焼きものまち。信楽小学校にもたくさんの焼きものがあります。その中に、ちょっとかわった形のものがああります。戦争の終わりにつくった「地雷」と「手榴弾」。どちらも戦争で使われる兵器です。信楽の子どもたちもその材料づくりに参加しました。

昭和19年、中島豊子さんは雲井国民学校（いまの雲井小学校）高等科の1年生。1年生全員で山から松の木を切ったものを運んだ。松の木は火力が強いから地雷の材料を焼くのにピッタリだったから。ほとんど毎日授業のかわりに木を運んだんだ。昭和20年になると、男の子は木を運び、豊子さんたち女の子は、地雷の形のカタにはめたねん土を取り出したり、サンドペーパーでみがいたり、日光でかわかしたりした。もう学校の授業はなくなって、夏休みも地雷の材料をついていた。

植木ばちが 兵器にかわる！

—焼きものの地雷と手榴弾—



▲焼きものの地雷（陶器製地雷）。地雷は土にうめて、その上をふむと爆発するしくみになっている。いま戦争が続いている国やカンボジアのように戦争が終わった国でも、地雷をふんで手足がなくなったり、死んだりする人たちがたくさんいる。地雷をなくすために、「地雷禁止国際キャンペーン」という取り組みや「対人地雷全面禁止条約」という国どうしのやくそくがある。



▼焼きもの手榴弾（陶器製手榴弾）。手で投げる爆弾のこと。

スパイに
気づかれるな

奥田博さんは、信楽国民学校を卒業すると、お父さんの仕事を手伝って地雷の材料をついていた。それは秘密でつくっていたから、ときどき軍隊の人が来て「スパイに知られるとこまるから、何をついているのかはしゃべるな」と言われたんだ。

学校にできた工場



▲陶器製のコンロ。いまはガスレンジを使うけど、昔は鉄でできたコンロを使っていた。それが戦争中は焼きものになったものもあった。

昭和19年5月30日から10日間、信楽国民学校高等科の子どもたちは、焼きもの工場に行かなければならなくなった。それから、だんだん行く回数も増えていった。そのころの校長先生は、学校の教室に手榴弾の材料をつくる工場をつかって、5、6年生にそこで働かせようと考えた。学校の工場は、昭和20年8月5日に完成した。学校のできごとを書いた書類には、「八月五日 生産教室諸設備完了 八月二十一日より陶製兵器生産・準備ニカカル」って書いてある。だけど8月15日に戦争が終わったから、学校で兵器の材料をつくることはなかった。

はたらく小学生

戦争には、人やモノが必要。人は兵隊さんのことで、モノは戦争をするための飛行機や戦艦、大砲や爆弾、銃、弾などの兵器、それから戦う兵隊さんの食べものや、着るものなど軍隊が生活するのに必要なすべて。それを「軍需物資」とか「軍需品」というし、つくるところは「軍需工場」といっていた。だから、戦争が始まると農作物や工場で作られる製品は、みんなの生活に役立たせるよりも、軍需物資として多くつくられるようになった。長い戦争だったから、働く人がだんだん少なくなってきて、中学生や小学生の子どもたちもお父さんが戦争に行った家の麦かりや稲かりを手伝ったりした。戦争が終わる1年前からは、いまの中学生や高校生と同じ年の人は軍需工場などに行くことになったし、小学生も、6年生の上に高等科っていうのが2年間あったけど、高等科の子どもたちは昭和20年の4月から1年間授業をしないことを国が決めたんだ。これは、小学生が働くようにするためにだよ。こうして、戦争の終わりのころには、子どもたちの多くは勉強するよりも、働く時間の方が多くなっていったんだ。そのことをみんなはどう思う？



◀甲南第二小学校の校長室の物おきの箱の中から見つかった青い目の人形。戦争の時の校長先生が、軍隊が来るから人形を見つからないようにと、戦死者の写真のうらがわにかくしたらしい。▼いまの甲南第二小学校



▶平野小学校では、古い校舎のかべの中から見つかった。大津市歴史博物館に展示されている。



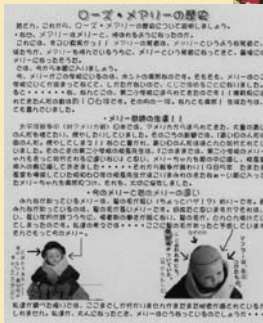
▲いまの平野小学校



学校のたからもの

こうなんちようりつせいに
甲南町立第二小学校では、青い目の人形をメリーちゃんと呼んでとても大切にしている。6年生は授業でメリーちゃんのことをいろいろ調べている。平成12年の6年生が調べたメリーちゃんの歴史。なぜメアリーがメリーとよばれるようになったのか、どうやって学校にきたのか、ロングヘアだったはずのメリーちゃんがなぜショートヘアになったのかなどを調べている。

「ローズ・メアリーの歴史」



▲授業中の写真
メリーちゃんの体重もはかった

アメリカからおひなまつりを見にやってきた —青い目の人形の物語—

少し古い感じがする人形は、ローズ・メアリーとジェーン・ハイランドという名前です。戦争が始まる前にアメリカから日本にやってきました。ひとみが青いので、「青い目の人形」とよばれています。

昭和2年、1万2千体の青い目の人形は、クジで選ばれた全国の小学校と幼稚園ようちえんにおくられました。もちろん滋賀県にもやってきて子どもたちは大喜びでむかえました。でも、太平洋戦争がはじまると、「敵国」の人形として、軍の命令で焼かれたりこわされたりしました。いまでは、滋賀県にはこの2体の人形が残されているだけです。

ジェーンちゃんのパスポート

▶平野小学校にあるお礼の手紙の下書き



おおつひらの
大津市の平野小学校では、人形がもっていたパスポートも見つかった。パスポートには「ひなまつりを見るために、日本にきた」と書かれている。また、平野小からの人形をもらったお礼の手紙には、人形を大切に、ホームシックにかからないようにすると書いたようだ。大津市歴史博物館てんじに展示されているジェーンちゃんは、青い目の人形をテーマにした授業じゆぎょうのときには、平野小の子どもたちのところに帰ってくるんだ。

戦った国、戦った場所

友情のしるし

てきこく
敵国アメリカの人形だからって焼かれた「青い目の人形」。敵国というのは戦争した相手のこと。日本はこの国と戦争していたの知っている？日本が戦争に負けたとき、書類にサインをした国々にはアメリカ、中国、イギリス、ソ連（いまのロシアなど）、オーストラリア、カナダ、フランス、オランダ、ニュージーランドの9カ国。「連合国」といわれていたところだ。日本は、中国では中国の人びとと、フィリピンでは、アメリカやフィリピンの人びとと、マレーシア・シンガポールではイギリスやインドの人びとと、インドネシアではオランダやインドネシアの人びとと、南太平洋の島じまではアメリカやオーストラリアやニュージーランドの人びとと戦った。中国の東北の方では、戦争が終わる少し前にはロシアの人びとと戦っていた。地図があれば見てごらん。アジアからオーストラリアの近くまでの広いところで戦争があったことがわかるだろう。そして、そこで戦った日本の人も「敵」といわれた国々にも、亡くなったりケガをしたりした。それから、戦った場所には、兵隊さんだけではなく、ふつうにそこでくらす人たちがいたんだ。そういう人たちは戦いが始まると家から逃げなければならないし、まきこまれて亡くなった人もいた。だから、戦って悲しいと思う。



▲人形をだっこして遊ぶ子どもたち

おおつながら
大津市の長等小学校で見つかった「青い目の人形」の写真。友情のしるしとしてやってきた人形のため、おひなさまをかざってかんげい会をした。



▶いまの長等小学校
▲かんげいのおゆうぎ

おとつあーん

こうらちようおさでら
甲良町長寺のおじいちゃん、おばあちゃんが話してくれた、わすれられない
兵隊さんのこと

きたがわ
北川ふみさん；みのやんが行かはるときを思い出すなあ。かわいそうになあ。
3人の子どもをおいていかはったもんな。
はしもりゆうぞう
橋本龍蔵さん；出征のとき、子どもらが「おとつあーん」というてできつき
よる。
北川ふみさん；嫁さんが死なはって間なしに出征がきたんやもんな。
橋本龍蔵さん；おじいさんおばあさんもなかったし、子どもらはおじさんが育
てはった。



戦争に行つた
人びと

兵隊さんのお見送り



▲2人の少年は東甲良国民学校の高等科2年生。高等科は小学校6年の上の学年だから13才か14才。満蒙開拓青少年義勇軍は、戦争のとき、中国の東北地方に日本がつくった満州国に行った少年たち。土地をたがやして農業すること、兵隊としての仕事があった。写真の少年は2人とも戦死した。

いまの甲良東小学校



▲小学校の向かいの図書館、戦争中もあった古い校舎を移したもの

こうら ひがしこうらくくみんがっこう
甲良町の東甲良国民学校（いまの甲良東小学校）
の子どもたちが、満蒙開拓青少年義勇軍として出
発する先ばいを甲良神社で見送る写真です。
子どもたちは、学校で組べつにならんで甲良神社
まで戦争に行く兵隊さんの見送りに行きました。
甲良神社には、ずらっと兵隊さんがならんでいま
した。そこで兵隊さんをはげます会をして、高学
年の子どもたちは尼子の駅まで送って行きました。



戦争が長くなると鉄砲や弾などをつくるための金ぞくが不足してきて、お寺の鐘や金ぞくでできた家庭用品まで出さなければならなくなった。学校にあった二宮金次郎の銅像も出された。

◀二宮金次郎の銅像にも兵隊さんと同じようにたすきをかけて、学校の子どもたちが見送っている。

銅像の出征

戦争に行くということ

昭和20年の終戦まで日本には、男の人は一生の間に決まった期間軍隊に入る「徴兵制度」というシステムがあった。20歳になると「徴兵検査」という身体検査のようなものをして、兵隊になれるかどうかランクをつけるんだ。いちばん上のランクの人は「甲種合格」っていわれて、そのうち何人かは軍隊に入隊したけど、その間に戦争が始まれば戦場に行かなければならなかったんだ。
もちろん、他の人たちが戦争が始まれば、ほとんどの人は兵隊にならないといけなかった。戦争をするには、たくさんの兵隊が必要だからね。そうして軍隊に入るためによび出されることを「召集」っていったんだ。「召集令状」とか「赤紙」っていうことば聞いたことあるかな。軍隊に入りなさいという通知書のことだ。ぜったいにことわることはできなかったから、どんな用事があっても決められた日時、決められた場所まで行かなければならなかった。
「召集令状」がとどいて戦争に行くことを「出征」というんだ。戦争がはげしくなると、近所の若い男の人はほとんど戦争に行つたし、終わりのころには、みんなのお父さんくらいの人も出征していった。そして、いまの高校生くらいの人も希望したら軍隊に入ることができるようになったんだ。
こうして、長い戦争の間、たくさんの人が戦争に行つた。毎日のように出征する人たちがいて、お家の人や近所の人たちは「バンザイ、バンザイ」とか「がんばって」といって見送つたけど、「無事に帰ってきて」「早く帰ってきて」という気持ちも強かったと思うよ。でも、戦争中はそういうことを言うてはいけなかった。戦争が終わって元気で家に帰れた人もいたけど、ケガをしったり亡くなった人たちもたくさんいたから、お父さんが帰って来なかった子どもたちもおおぜいいたんだ。「戦争に行くということ」をみんなも考えてみてほしい。

ねらわれた学校



—飛行場に近い小学校—

八日市には戦争が終わるまで飛行場がありました。八日市の子どもたちは、飛行機の爆音を聞きながら大きくなりました。

御園にも戦争があった！



▲飛行場の写真。三角屋根のたてものの前の方に飛行機がならんでいる。

「飛行機に、機関銃や、バクダンなどほかにもつんでいて、びっくりしました。弾丸が太ももに1回あたっただけで、死ぬなんてこわいと思いました。」平成11年の6年生、愛ちゃんの感想。6年2組のみんなはおじいちゃんやおばあちゃんに戦争の話を聞いたり、戦争中の御園のことや飛行場のことを調べたんだ。

戦争が始まると、飛行場にはたくさんの兵隊さんが来ました。そして、飛行機がいくつも飛び立ちました。飛行場は何度も空襲を受けました。飛行場が近くにある御園小学校の子どもたちは、つらくて悲しい体験をしました。

戦争に使われた飛行機

飛行機を発明したのはライト兄弟。今から100年くらい前のことだ。空を飛ぶことが目的の飛行機だけでなく、軍隊は戦争に使うことを思いついた。飛行機は地上の様子を調べるのに便利だし、どんな場所にも爆弾をおとすことができるだろう。そして、第二次世界大戦のときに、飛行機は本格的に使われるようになった。だから、戦争中は飛行場がよく攻撃されたんだ。

「B29の空襲」や「グラマンから機銃掃射された」といったことを聞いたことがあるかな。どちらもアメリカの飛行機で戦争中、日本を攻撃したんだ。機銃掃射は、飛行機から機関銃で撃つことだけど、低空で攻撃するから、自分がねらわれていることがよくわかるし、パイロットの顔まで見えるからみんなこわかったんだ。日本は木造の家が多いから、B29は、焼夷弾っていう燃える爆弾をおとした。それで多くの日本のまちは燃えてしまった。

大空を鳥のように飛ぶことは昔の人たちの夢だった。夢はかなったけど、それがおおぜいの人を殺してしまう戦争の道具になってしまうなんて、空を飛ばうと思ってがんばった人たちは想像もしてなかったんじゃないかな。

もくじへ

死んでしまった弟



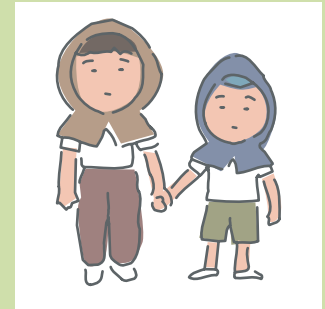
▲いまの御園小学校

弾こんの石
御園小の校庭にある石。
銃弾のあとが残っている。



7月24日の朝、御園国民学校の6年生の市川芳枝さんと、2つ下の弟の義信さんは、いつものように学校に行った。学校についてすぐに、空襲がくるかもしれないからって、家に帰ったんだ。そして、家の防空壕に入ろうとしたそのとき、すぐそばに爆弾がおちた。気を失った芳枝さん。弟の義信くんは爆弾のはへんをおなかに受けてまもなく亡くなった。

そして、気がついたとき芳枝さんの目は見えなくなっていた。戦争から帰ってきたお父さんは、芳枝さんの目が見えないことに気づいて、芳枝さんをだきしめて泣いたんだ。



目玉焼きをくれた兵隊さん

武久善彦さんは、御園国民学校の3年生。

昭和20年の夏のこと、飛行場に訓練を受けるためにたくさんの兵隊さんたちがきた。兵舎が足りなかったから、学校の校舎を使うことになったんだ。学校へよく遊びに行っていた武久くんは、すぐに兵隊さんたちと友だちになった。

ある日、武久くんが遊びに行くと、若い兵隊さんがお昼ごはんに目玉焼きをやっていた。そのころは、タマゴはすごいごちそうだったから、武久くんはじっと目玉焼きを見つめてしまった。それに気づいた兵隊さん。「ぼん、目玉焼き食べるか」と言ってくれたんだ。大喜びで目玉焼きをもらった武久くんは、それから若い兵隊さんと大のなかよしになったんだ。



7月24日、御園国民学校が攻撃された

その朝、とつぜん飛行場が空襲にあった。そのときは飛行場だけじゃなくて学校も攻撃された。空襲が終わって友だちと学校の様子を見にいった武久くんは、ろう下に流れおちた血を見た。

次の日、学校に行った武久くんは、知り合いの兵隊さんに「ぼん、おまえに目玉焼きくれた人な。きのう亡くなったよ。」と教えられた。



こんなもん食べている人と戦争してたんや

おおつ しが しはんがっこう だんしふ ふぞくこくみんがっこう
 大津市の滋賀師範学校男子部附属国民学校
 (いまの滋賀大学教育学部附属小学校)の
 6年生だった澤村達郎さん。
 戦争が終わって大津にやってきたアメリカ
 進駐軍^{しんちゆうぐん}っていったけれど、そこに
 つとめている知り合いの人から進駐軍の食
 べものをときどき分けてもらった。それを
 食べてみた澤村くん。「こんなおいしいも
 のを食べている人と戦争してたんや。負け
 るはずや。」と思ったって。



終戦後しばらくは、墨ぬり^{すみ}が授業^{じゆぎょう}のかわりだった

はしもとたけひろ ひこね たかみやこくみんがっこう
 橋本武浩さんは、彦根市の高宮国民学校(いまの高宮
 小学校)の4年生の先生でした。
 橋本さんは、子どもたちにすずりと墨と筆を学校にも
 ってくるように言いました。教室で橋本さんは「この
 ページの何行目から何行目までに墨をぬって消しなさい。
 この絵にも墨をぬりなさい。そしてこのページは
 切り取るように」というと、子どもたちはすなおにいう
 ことを聞きました。戦争のことはもちろん、飛行機
 の絵なども墨で消しました。



▲橋本さんが墨をぬった音楽の教科書。墨がぬられのたのは「日本海海戦」「われは海の子」「落下傘部隊」など。

消された教科書

—終戦とその後のこと—

戦争が終わり、2学期が始まりました。学校でまず始めたのは教科書に墨をぬったり、やぶいたりすることでした。



5年生の国語の教科書。戦争のことに書かれたところを墨で消している。

敵討ちはダメ



戦争が終わってしばらくは、子どもたちに
 きかせてよい童話といけない童話があった。
 「金太郎^{きんたろう}」や「浦島太郎^{うらしまたろう}」はよかったけど
 「桃太郎^{ももたろう}」や「かちかち山」はいけなかつ
 た。桃太郎は鬼をやっつけに行く話、かち
 かち山はウサギがタヌキにしかえしする話
 だからダメだった。

戦争が終わって

昭和20年8月15日に戦争が終わった。日本が中国の東北地方で戦争をはじめた年(昭和6年)に生まれた子は、終戦のときには14歳、いまの中学2年生になっていた。それだけ長い間日本は戦争をしていたんだ。日本はぜったいに負けないと教えられていた子どもたちは、戦争に負けたことが信じられなかったけど、空襲を知らせるサイレンがなって、夜中に逃げたり、途中で学校から帰ったりしなくてもよくなったし、もうこわい飛行機もこないことがとてもうれしかった。戦争が終わって、それまで教わってきたことはまちがいであったときの気持ちを、みんなは想像できるかな。しばらくの間は、食べるものが不足したり、ものも少なく新しい教科書もなかなか手に入らなかったりしたが、いろいろな夢や希望をもてるようになったんだ。

燃やされた教科書

もりやま おづ
 守山市の小津国民学校(いまの小津小学校)の先生だった西木とし子さんは、「教科書をやぶることは子どもたちにはさせないでおこう」といって、子どもたちの教科書を職員室に集めて、やぶって燃やした。



高宮小学校の6年生がまとめた戦争の話

高宮小の6年生は、戦争中の話を地域のおじちゃん、おばあちゃんに聞いて、それを新聞にまとめた。

「生きのこれたことがすごいと思いました」
 「戦争はとても苦しいことだと思いました」
 「戦争をしても得なことはない、失うことばかりだ」
 「なんでもっと早く終わらせなかったのだろう」
 とか、みんないろんなことを考えたんだ。



滋賀県と戦争

国内外の主なできごと

大正時代から昭和へ
このころから不景気になる。

1931(昭和6)
満州事変がはじまる。一日本軍は中国の東北地方での鉄道爆破事件をきっかけに戦争をはじめた。

1932(昭和7)
「満州国」を建国する。一日本は中国の国内に満州国をつくり、多くの日本の人びとが移住した。5.15事件がおこる。
一軍人が大臣を殺害する。

1933(昭和8)
日本は国際連盟を脱退する。

1936(昭和11)
2.26事件がおこる。
一軍人が大臣らを殺害する。

1937(昭和12)
日中戦争がはじまる。
一日本と中国の全面戦争となる。一国民精神総動員運動がはじまる。

1938(昭和13)
「国家総動員法」ができる。一働く人やモノを政府が思うように戦争につぎこめるようになった。

1939(昭和14)
ノモンハン事件がはじまる。一満州国とモンゴルの国境で日本軍とソ連軍(いまのロシアなど)が衝突。
「国民徴用令」が公布される。
第二次世界大戦がはじまる。
一ヨーロッパでも戦争がはじまる。

1940(昭和15)
ぜいたく禁止令が実施される。
日独伊三国同盟が結ばれる。
一日本はドイツ・イタリアと軍事同盟を結び、アメリカ・イギリスなどの連合国と対立。
大政翼賛会が結成される。

1941(昭和16)
「国民学校令」が公布され、尋常小学校が国民学校となる。

滋賀県の主なできごと

青い目の人形が平野小学校や甲南町立第二小学校などにくぼられる。(昭和2年)

国防費の献金運動で全県民が一人3銭ずつ献金することになる。
初めての国防展が八日市飛行隊で開催される。

滋賀県で大防空演習が行われる。

満州農業移民に滋賀県から30人を決定する。

「燈火管制」規則により、屋外灯が制限される。

八日市で女子勤労報国隊を結成する。

近江神宮の建設がはじまる。

大政翼賛会滋賀支部が結成される。

滋賀県から満蒙開拓青少年義勇軍273名が出発する。
大津連隊区司令部が復活する。
代用燃料車が県内でいっせいに走るようになる。

1941(昭和16年)

太平洋戦争はじまる。一日本軍がマレー半島に上陸、ハワイの真珠湾を攻撃する。一

1942(昭和17)

衣料・みそ・しょうゆの切符制が実施される。
ミッドウェー海戦で日本軍は敗北。この後日本軍の戦いは不利になっていく。

1943(昭和18)

日本軍が、ガダルカナル島撤退を開始する。
イタリアが無条件降伏する。
全国学徒出陣で学生も戦場に行く。

1944(昭和19)

日本海軍がマリアナ沖海戦で敗北、航空機のほとんどを失う。
サイパン島の日本軍守備隊3万人が全滅する(玉砕)。
米軍機B29が東京を初爆撃。
学童集団疎開がはじまる。
学徒勤労令が公布され、中学生以上の全生徒が工場働くことになる。

1945(昭和20)

東京、名古屋、大阪などが大空襲を受ける。
硫黄島の日本軍守備隊2万3000人が全滅する(玉砕)。
アメリカ軍が沖縄本島に上陸する。
ドイツが無条件降伏する。
広島に原子爆弾が投下される。
ソ連が対日宣戦布告し、参戦する。
長崎に原子爆弾が投下される。
日本が無条件降伏する(終戦)。

大津海軍航空隊が設置される。

滋賀県の金属供出が全国第4位となる。
滋賀県商業者勤労報国隊が九州の炭坑に向け出発。
薪と木炭生産の重点県に指定される。
「満州滋賀県報国農場」創設を計画する。

大津陸軍少年飛行兵学校が開校される。
日赤の看護婦さんが戦場へとむかう。
食糧増産の労働力不足のため、京都・大阪の大学などの学生の応援を求める。
松原・野田・菅根沼等の内湖を干拓することが決まる。

滋賀海軍航空隊が設置される。
彦根経済専門学校3年生全員、名古屋の工場へ働きに行く。
「学童疎開」で大阪市内の小学生たちが滋賀県に来る。
長浜小学校1年生の武田倫江さんが大阪の小学生の絵を作文にかく。
この冬は大雪でマキノ東小学校に来ていた大阪の子どもたちが雪かき。

琵琶湖の干拓を手伝うために岩手・青森・新潟の各県の人々が滋賀県に来る。
飛行機の燃料用イモづくりに、軍隊3000名が県内の各市町村に来る。
上田上小学校にも60人ほどの兵隊が来る。

(3月4日)
旭森小学校の高居くんが家に帰る途中に撃たれてケガをする。(5月14日)
城南小学校の爆撃(6月26日)
御園小学校3年生のたけひさくんが目玉焼きをくれた兵隊が八日市の飛行場の空襲で亡くなる。

(7月24日)
大津の東洋レーヨンが空襲される。(7月24日)
御園小学校6年生の市川芳枝さんの弟の義信くん(4年生)が八日市飛行場の空襲で亡くなる。

(7月24日)
信楽小学校の兵器を作る工場が完成。(8月5日)
小学校で教科書に墨をぬる。(2学期)

しらべてみよう、滋賀県の戦争のこと

キミは、学校やテレビなどで、広島や長崎の原爆の話や、飛行機で敵の船に体当たりする特攻隊の話などを聞いたことがあると思います。そうしたことと、この本でとり上げている滋賀県の学校であったことのお話は、つながっています。

たとえば、上田上小学校の「ジャガイモをつくりにきた兵隊さん」のお話があります。この兵隊さんたちはどうしてジャガイモをつくりにきたかわかりますか？

「戦争中は食糧が不足して、みんなおなかが減っていたから、それで兵隊さんがみんなのためにジャガイモをつくってあげたんだ」とおもうでしょう？正解のように聞こえるけれど、正解ではありません。じつは、ジャガイモから飛行機の燃料をつくらうとしていたんです。

お米からお酒ができるように、ジャガイモからもお酒ができます。お酒の中にはアルコールが入っています。お酒の中からアルコールだけをとりだして集めれば、それが飛行機の燃料になるんです。戦争の終わりごろにはガソリンが不足したので、ジャガイモのアルコールを飛行機の燃料にしようとしたんです。

このころみは、あまりうまくいきませんでした。もしうまくいっていたら、ジャガイモからつくったアルコールを燃料にして、敵の船に体当たりして死んだ人がでていたかもしれません。

このように、60年前の戦争のとき、滋賀県でもいろいろなことがありました。もしキミに65歳以上のおじいさんやおばあさんがいれば、おじいさん、おばあさんはかならず60年前の戦争のことを知っている。もしキミの家の近くに大きな木が立っていたら、その木はじぶんの上の大空を、爆弾を積んで飛んでいた大きな飛行機のことをきっとおぼえている。もしキミの学校が、古くからある学校だったら、60年前のキミたちの「先輩」たちは、戦争のことをきっとおぼえている。

でもこうしたことは、教科書には書かれていません。滋賀県で暮らす、自分たちが調べるしかありません。いま、戦争のことをおぼえている人は少なくなってきています。だから、いまのうちにいろんなことを調べて、記録しておかなければ、この本に書かれているようなお話は、永遠に忘れられてしまいます。

いまキミは戦争なんか大キライだと思っているでしょうが、戦争のとき、滋賀県で起こったことを知り、そのことを体験した人の気持ちを聞けば、もっともっと戦争がキライになります。そして平和が大好きになります。そしていま世界のいろいろなところで起こっている戦争を「どうしてだろう？」と思うようになります。その気持ちを、キミたちの子どもや世界の人たちに伝えれば、それはまた子どもの子どもの間に伝わり、友だちの友だちにも伝わっていくことでしょう。

まずどこからはじめればいいのか？

いろんな方法があるよ
たとえば

インタビューしてみる方法 ○キミたちのおじいさんやおばあさん、近所のおじいさんやおばあさんにきいてみよう（子どものときの写真なんかみせてもらうとお話がわかりやすいよ）

資料をさがしてみる方法 ○先生にこんなものがないかきいてみよう
・古い学校の日誌
・むかしの学校の写真
・古い卒業生名簿（近所に卒業生がいないかみてみよう）
○図書館で調べてみよう
・図書館でむかしのことを調べてみて、そのなかに自分の学校のことを書いていないか見てみよう

調べたあとはどうするの？

「記録」をつくろう

○みんなで手わけして、「記録集」をつくっておこう
○「記録集」は、写真や文章で自由につくっていいけれど、そのときに感じたことや、思ったことを記録しておくことがたいせつだよ

写真提供

外村公一 由上龍男 奥川貞一 中川三治郎
大津市立堅田小学校 大津市立上田上小学校 甲南町立第二小学校
大津市立長等小学校 彦根市立高宮小学校 大津市歴史博物館
(敬称略 順不同)

滋賀県と戦争のことをもっと知りたかったら
「バーチャル平和祈念館」というホームページをみてみよう
<http://www.pref.shiga.jp/heiwa/>
Eメール ea00@pref.shiga.jp

わからないことや相談したいことがあったら電話してみよう

滋賀県健康福祉部健康福祉政策課
(077) 528-3514

学校にみる滋賀県民の戦争体験
戦争なんか大キライ

平成14年3月発行
編集・発行 滋賀県健康福祉部健康福祉政策課
〒520-8577 大津市京町四丁目1-1
企画・編集協力 (株) シー・ディー・アイ
デザイン 川添佐代子